

# Living Water

Whoever drinks the water I give them will never be thirsty again.  
Indeed, the water I give them will become in them a spring of water  
welling up to eternal life.

vol. **123** May. 2026



# Living Water 活水学院報

『Living Water』は、活水学院での学びや学生・生徒たちの成長、卒業生のその後の活躍などを伝える広報誌です。教育の現場のいまが伝わる一冊、地域や社会とつながる学院の姿をご覧ください。

## CONTENTS

- 2 《巻頭特集》  
**社会に開き まちと共に育つ  
大学のかたち**
- 4 活水ウェルビーイングセンター設立のご案内
- 5 RESEARCH／研究報告  
**首里城正殿「垂飾」の刺繍復元プロジェクト**
- 7 先輩たちの今 Close up!／香月 ゆみ さん  
「人に支えられ、社会に貢献する」
- 9 High School Initiative／高校の取り組み  
活水高校写真部「世界ダウン症デー写真展」  
レンズ越しに出会った、あたたかな笑顔
- 10 内定者interview
- 11 健康生活学部 生活デザイン学科／暮らしのまなざし  
暑い都市シンガポールに学ぶ!「もう一つの快適性」
- 12 Hello 研究室／島田 知和 講師  
「保育実践の変容プロセスに関する研究」
- 13 KWASSUI ALUMNI

### 巻末ページ

- 活水Library 働くっておもしろい! 「職業」を描いた本
- 潜入!活水女子大学図書館  
30万冊の「知の迷宮」へ

発行元／活水学院 編集／学院広報誌編集委員会 2026.5発行  
〒850-8515 長崎市東山手町1-50  
TEL 095-822-4107(代表)



<https://www.kwassui.ac.jp>

「活水学院報」題字 | 藤原 朱石

表紙写真撮影協力/S'AIMER cafe'  
長崎市大浦町5-41



◀ Instagram  
[https://www.instagram.com/saimer\\_cafe/](https://www.instagram.com/saimer_cafe/)



《巻頭特集》

## 社会に開き まちと共に育つ 大学のかたち

長崎・東山手の丘に建てられた活水学院は、1879年（明治12年）、アメリカ人女性宣教師エリザベス・ラッセルによって創設されました。キリスト教に基づく人格教育を礎とし、「一人ひとりの尊厳を重んじる」教育を実践してきたその歩みは、147年にわたり連綿と受け継がれています。知性と品性を備え、社会に貢献する人材を育ててきた歴史は、本学院の揺るぎない誇りであり、教育の基盤です。この伝統を確かな礎として、活水学院は創立150周年に向け、新たな飛躍への歩みを進めています。

S'AIMER cafe'  
中村 美登利 さん

国際文化学科3年  
大柳 沙耶 さん

国際文化学科3年  
大島 七海 さん  
佐賀県立鹿島高等学校卒

子ども学科  
島田 知和 講師



## 社会に開き まちと共に育つ 大学のかたち

### 共学化への決断と 同窓生への思い

このたび活水女子大学は、2027年度より「活水大学」へ校名を変更し、2028年度より大学の完全男女共学化を実施することを決定いたしました。同窓生の皆様の中には戸惑いやご懸念を抱かれる方もおられることと拝察いたしますが、その思いは母校を愛し、歴史を共に支えてこられたからこそ生まれるものであり、私たちはそのお気持ちを真摯に受け止めております。

このたびの決断は、キリスト教精神に基づく全人教育という建学の理念を受け継ぎつつ、性別の枠を越えて、時代の要請に応える教育を実践していくための前向きな選択にほかなりません。

### すでに始まっている 共学の学び

2025年度より看護学部において先行的に共学化を実施し、十数名の男子学生が女子学生とともに学びを深めています。学生たちは互いの視点や価値観の違いを尊重しながら、より実践的で深い人間理解を育んでいます。この現実の風景が、共学の意義と可能性を物語っています。

### 産官学連携 地域と共に創る 「社会に開かれた大学」へ

活水女子大学が目指すのは、単に男子学生を受け入れることではあり



ません。真に社会に開かれた大学へと進化することです。産官学連携プロジェクトもその一つです。

現在、長崎・大浦地区の地元レストランと連携した地域協働プロジェクトが動き始めています。国際文化学科の学生が、子ども学科の教員の指導を受けながら地域に出向き、子どもも家族も楽しめる居場所づくりの観点から、地元食材を活かしたメニューの提案や食空間の発信に取り組んでいます。学部・学科の垣根を越えたこうした学びは、将来の産官学連携へとつながる実践の第一歩として、着実に育ちつつあります。

147年の歴史が培った広域ネットワークを活かし、地域課題の解決と人材育成を同時に担う、それが新生・活水大学の使命です。

### Student First Policy —すべては学生生徒の ために

今後の改革において最も重視するのは、スチューデント・ファーストの理念です。共学化も産官学連携も、学生がより広い視野を獲得し、社会と直接つながる経験を積むための最良の環境整備であると確信しております。

### 150周年へ、誇り高き 活水の未来へ

147年にわたる歴史は、常にその時代の要請と真摯に向き合い続けてきた歩みの積み重ねです。活水学院はこれからも、変わるべきものと守るべきものを見極めながら、地域社会と世界に貢献する人材の育成に全力を注いでまいります。変わらぬご支援とご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

## 活水ウェルビーイングセンター設立のご案内

### 〉 センター設立にあたって

2026年4月、「活水ウェルビーイングセンター」を設立しました。本センターは、心身の健康と生活の質の向上を支え、大学の知見を地域社会へと還元する「知のハブ」として、学生・教職員・地域の皆様とともに歩む場です。147年にわたり「一人ひとりの尊厳を重んじる」教育を実践してきた活水の精神を、現代的なかたちで社会に開いていく、それが本センター設立の根本にある思いです。

### 〉 変化の中に 「育ちゆくもの」を見る

大学が転換期を迎える時、人はどうしても「失われるもの」や「負担」に目を向けやすくなります。変化する環境、新しい制度、これまでとは異なる学生像、その変化は、ときに不安や戸惑いを伴います。しかしその一方で、変化の中には、これまで見えなかった可能性や新たな出会い、大学の未来を形づくる小さな芽吹きもまた存在しています。

教育とは、目に見える成果だけで成り立つものではありません。学生の小さな成長、誰かの挑戦する姿、支え合いの関係、まだ言葉にならない希望、そうした「見えにくい変化」の積み重ねによって、大学という共同体は少しずつ形づくられていくものと考えます。共学化や校名変更もまた、単なる制度

変更ではなく、多様な人々が出会い新たな関係性を築き直していくプロセスです。だからこそ今必要なのは、「何が変わるのか」だけではなく、「この変化の中で何を育てていくのか」を見つめる視点ではないでしょうか。

### 〉 センター長からの メッセージ

岩瀬貴子教授(センター長)は、次のように語ります。

「ウェルビーイングとは、一人ひとりが安心して自分らしく生きられる状態です。私は長年『人としての安らかさ』を研究してきましたが、それは個人の心の中だけで完結するものではなく、他者との関わりや社会全体の支えがあつてこそ実現するものです。大学には、その知を社会に開き、地域と協働して実践していく責任があります。学生が自分や他者のこころを深く理解する力を育み、その学びを家庭、職場、そして地域社会の支援へと波及させていく。それこそが本センターの使命です。」

### 〉 ともに「安らかさ」を 育てる場として

本センターは、食・健康・子育て・高齢者支援といった「生活の課題を解決する方法」を地域の皆様と共に考え、地域ぐるみのウェルビーイングを育てていきたいと考えています。具体的

には、こころの健康相談や生活支援プログラムの提供、ウェルビーイングを軸とした授業・カリキュラム開発・高校生の探究活動への協力、行政・医療・福祉機関と連携した地域支援活動とこれらに関する研究成果の社会還元を主な柱として活動してまいります。安らかさとは、一人でも育てることはできますが、様々な人との関わり合いの中で共に育て合い、豊かにしていくもの。活水ウェルビーイングセンターは、その信念とともに、変化の時代を生きるすべての人の傍らに寄り添ってまいります。



活水ウェルビーイングセンター長／副学長

*New Opening!*

それぞれの専門知を活かしながら、社会が抱える課題と向き合い、  
新たな可能性を切り拓いている本学の教員たち。  
その探究の先に見据える未来と、研究に込めた想いをお届けします。



## 首里城正殿「垂飾」の刺繍復元プロジェクト

沖縄県の首里城は、2019年秋の火災によって正殿を含む複数の建物が焼失しました。復興にあたって染織分野に参加可能かとの打診を受け、私は沖縄生まれで中学と高校の6年間は首里で過ごしたことに加え、沖縄の古い刺繍技法について研究の最中であつたことから、即諾しました。本稿では、活水の教員が取り組んだ地域貢献活動として、首里城正殿「垂飾」の刺繍復元に携わったことを概述します。

### 刺繍復元に携わるまで

2005年

沖縄県立博物館の学芸員から「技法がよくわからない刺繍がある」との相談を受け、沖縄の古い刺繍を初見。針運びはグジャラート（インド）の刺繍に似るものの、細部は異なり、他地域の伝統刺繍に類例は見当たらず、国内外での調査研究に着手しました。

2007年

沖縄県立博物館・美術館からの依頼を受け、琉球王国時代の神女（ノロ）衣裳の模造復元（刺繍）を担当。鹿児島県の奄美群島から沖縄県の宮古・八重山諸島を含む琉球文化圏のいくつかの島々には、ノロ衣裳や神衣裳と称される、15世紀～16世紀に製作された刺繍品が伝世しており、独自性が強い複数の刺繍技法があることを確認。最も汎用されている、千鳥縫いやヘリンボーンステッチ様の技法を「琉球千鳥縫い」と呼称することを提唱し、他の技法も数種解明・命名。未解明多数。



▲琉球千鳥縫い

2014年

前期の半年間の海外留学中、北米と中米での調査を行い、成果を得ました。

2018年  
～  
2020年

沖縄県立博物館・美術館主催「琉球王国文化遺産集積・再興事業」（Ⅰ期）において、伊是名島のノロ衣裳の模造復元（刺繍）と、沖縄県在住の有志6名に技術指導しました。

2021年

琉球古刺繍保存会（以下、保存会）を結成し、調査・復元・普及活動などを推進しました。

### 刺繍復元にあたって

2022年に、国内外からの寄附金を基にして、2026年秋の完成を目指す「首里城復興基金事業監修会議」が設けられ、私は染織分野の監修、「垂飾」の刺繍、保存会の会員10名への技術指導（後継者育成）に携わりました。

「垂飾」は正殿一階の御差床（うさすか）中央に設置されるもので、表裏・2枚とも縦24cm・横3.6m、赤い綿子地の基布に火焰宝珠・龍・瑞雲の文様が金糸と5色の絹糸を用いた刺繍で表現されています。焼失した垂飾は日本

刺繍の技法で製作されており、沖縄のいにしへの刺繍技法は途絶えていることから、まず、試作品を作って、ワーキング部会にあげ、監修会議で決める、という手順がとられました。そして、使用技法の根拠を明確にするため、現存資料および関連資料や古写真の熟覧調査も重ねました。特に、今回の復元では「前回・平成の復元以降の調査研究の成果を反映する」との方針が示されていましたので、瑞雲文の刺繍には「琉球千鳥縫い」を含む3つの技法を用いることを提案し、採択されています。

刺繍作業は本年・2026年1月には概ね完了し、2月には湯口院長と広瀬学長が監修会議の田名委員長の表敬訪問を受けてくださり、「垂飾」がマスコミへも公開されました。



### おわりに

私は、先人の手わざを次世代へつなぐことに微力ながら寄与したく、今回の事業に参加しました。昨年度から新たに「琉球王国文化遺産集積・再興事業」（Ⅱ期）における久米島ノロ衣裳の模造復元を保存会として受託しています。私にとって沖縄の刺繍は「命の刺繍」です。これまでの成果を糧にして、今後はライフワークとしての活動になります。活水学院・活水女子大学から賜りました多大の、長期にわたるご支援とご協力に深く感謝いたします。



### profile

健康生活学部 生活デザイン学科

寺田 貴子 現・非常勤講師、前・特別専任教授  
（琉球古刺繍保存会 会長）

長崎大学大学院海洋生産科学研究科博士  
後期課程修了  
専門領域：生活科学、衣生活、アパレル科学  
主要担当科目：クラフトデザインⅠA・B、アパレルデザイン／デザイン素材と技術、学科専門セミナーⅢ・Ⅳ、卒業研究  
所属学会：日本家政学会

先輩たちの今

Close up!



福田 あかり さん

東京支社長  
香月 ゆみ さん

中村 綾那 さん

## 人に支えられ、 社会に貢献する

NIB東京支社(日本テレビタワー21階)  
新橋・汐留の高層ビル群に囲まれたオフィスで、東京支社メンバーとともに

### NIB長崎国際テレビ東京支社長 香月 ゆみ さん

短大英文科を卒業後、香月さんが社会人としての第一歩を踏み出したのは、「NIB長崎国際テレビ」の前身、新局設立準備事務所でした。激動するメディア業界のなかで、情報の信頼性と放送の公共的役割を問い続けてきたその歩みは、そのままNIBの歴史とも重なります。現在は東京支社長として新たな責任を担う香月さん。これまで支えてくれた人々への感謝、大切にしてきた想いについて、お話を伺いました。

#### Profile

長崎生まれ、1990年短大英文科卒、NIB入社。営業部、事業部、編成部を経て、現在東京支社長兼業務部長。  
オフの時間にはゴルフを少々、趣味は薬膳料理を学ぶこと。

#### 開局の熱気の中で学んだこと

1990年卒業、その年新局(NIB長崎国際テレビ)設立準備事務所へ入社しました。まだ放送局の体制も整っていない時期であり、すべてが手探りの状態からのスタートでした。  
開局準備のため、日本テレビ系列各局から多くの応援スタッフが派遣されていました。その皆様は今各局の幹部として活躍されています。開局前の緊張感あふれる現場で、そうした放送人たちの仕事に向き合う姿勢を間近で学べたことは、香月さんにとって大きな財産となりました。「地方系列局の立ち上げという特別な時期に、多くの先輩たちから直接教えることができました。一流の方々の仕事への向き合い方を間近で見ることができた経験は、私の社会人人生の原点になっています」  
人との出会い、そして教え。その一つひとつが、香月さんの仕事の骨格を形づくっていきました。

#### スポットデスク・編成という責任

香月さんがキャリアの中で特に印象深かったと振り返るのが、「スポットデスク」の仕事です。営業が獲得した

CMを、どの時間帯のどの枠に入れるかを判断するその仕事は、スポンサーの思いや戦略を、放送というかたちに具体的に落とし込んでいく役割でもありました。  
「どのCMを、どの時間帯に、どう届けるか。その一つひとつの判断に責任がありました」  
一本のCMにも、届けたい相手や託された意図があります。それを最もふさわしいかたちで視聴者へ届けるために、正確さと緊張感が求められました。華やかに見える放送の世界は、そうした見えない積み重ねによって支えられているのです。そして、この経験を基盤に、その後は編成部で長くキャリアを重ねることになります。スポンサーや視聴者に思いを向けながら、営業・制作・報道それぞれの努力を「放送」という形に整えていく。編成部の仕事には、社内外をつなぐ役割があり、大きなやりがいを感じてきました。

#### 支社長として新たな責任

現在、香月さんはNIB東京支社長という重責を担っています。東京支社は、全国の広告主や広告会社とつながる重要な拠点であり、その成果は地方局であるNIB本体の経営にも大きく

影響します。

「これまで多くの上司や同僚に支えられてここまで来ました。今の私の役割は、優秀な部下たちが安心して力を発揮できる環境を整えることだと思っています」  
支えられる立場から、支える立場へ。長年の経験と信頼関係が、現在の仕事を支えています。

#### 自分らしく、しなやかに生きる

東京での単身赴任生活は一年あまり。思いがけず、それは家族との関係を見つめ直す時間にもなりました。  
「離れて暮らしてみて、これまで以上に家族に優しくなった気がします」  
オフの時間には、東京勤務をきっかけに始めたゴルフを楽しんでいます。ゴルフを通じて仕事仲間との親交も深まり、仕事以外でも多くの友人ができました。忙しい日々の中でも自分らしさを失わない。その言葉には、学生時代に培われた価値観が今も息づいています。SNS時代においても、信頼と共感を大切にする放送の価値は変わりません。香月さんの挑戦は、今も続いています。

#### インタビューを終えて

「活水で学んだ、“おごらず感謝の心を持つ”という教えを、今も大切にしています。」

そう語る香月さんの言葉には、母校への深い愛着と、学生時代に培った素地への誇りがにじんでいました。

技術がどれほど進化しても、放送の根底にあるのは「人に支えられ、社会に貢献する」という精神です。香月さんの姿勢は、いま活水で学ぶ後輩たちにとっても、社会とどのように向き合うべきかを示す一つの道標となるでしょう。



高校の取り組み



## 活水高校写真部「世界ダウン症デー写真展」 レンズ越しに出会った、あたたかな笑顔

3月20日から22日までの3日間、みらい長崎ココウォークにて「世界ダウン症デー写真展」が開催されました。本写真展は、ダウン症のある方々がいきいきと暮らす姿を発信することを目的に、染色体障害児・者を支える会「パンピの会」と活水高校写真部とのコラボレーションにより実現したものです。

初めての取り組みではありましたが、昨年10月の顔合わせの時点から、生徒たちは真剣にこの企画と向き合っていました。ダウン症のあるお子さんを育てる保護者の方々のお話を伺い、思わず涙を流す生徒の姿も見られ、生徒たちの心が大きく動かされていると感じました。

一方で、生徒たちが人を被写体として撮影する経験は十分とは言えません

でした。そのため、被写体の魅力を引き出すようなコミュニケーションを取れるか、不安もありました。しかし、そのたびにダウン症のある方々がその緊張を和らげてくださいました。手を取ってダンスの練習に誘ってくださったり、笑顔でハイタッチをしてくださったりと、あたたかな関わりのなかで、生徒たちも次第に打ち解けていきました。

そして、「自分たちが肌で感じた優しさや明るさを、多くの方々に届けたい」という思いが、生徒たちの中に芽生えていきました。12月には毎週末、作業所や体育館を訪れ、ダウン症のある方々が働く姿や趣味を楽しむ姿を1000枚ほど撮影しました。展示写真を選定する際には、「この笑顔、かわいいよね」「どちらの写真のほうが楽しさ

が伝わるかな」と話し合う声が聞こえ、生徒たちとダウン症のある方々との距離が確実に縮まっていることを感じました。

展示にあたっては、折り紙や各作業所の解説メモも添え、来場者の皆様により深く理解していただけるよう工夫しました。また、写真展をご覧になった被写体ご本人からも感想をいただき、大きな励みとなりました。

今回の写真展の開催にあたり、ご協力いただいたパンピの会事務局の皆様をはじめ、関わってくださったすべての方々に心より感謝申し上げます。この経験を糧に、今後の活動へとつなげていきたいと思っています。

高校写真部顧問 菅 のの香

## 内定者 interview

活水での学びを経て社会へ羽ばたく2名の内定者に  
学校生活をどのように過ごし、  
なぜその道を選んだのかインタビューしました。

### 自分で見て、聞いて、確かめて掴んだ 自分らしい道



国際文化学部 日本文化学科  
地域ビジネスコース 2026年卒業

大和リース株式会社  
神戸支店

錦織 翼 さん  
(長崎南高等学校卒)

大学では、官民パートナーシップ(PPP)や民間資金活用型公共事業(PFI)、地域創生について学び、その社会貢献性の高さに強いやりがいを感じました。就職活動では、大学の先生方やキャリアセンターなどを活用しながら、合同説明会や会社説明会、インターンにも積極的に参加しました。なかでもラジオ局での長期インターンは、自分の成長を大きく実感した経験です。社会には勉強だけでは学べないことがたくさんあると実感し、働くことの責任を学んだことで、社会人としての意識が大きく変わるきっかけになりました。実際に自分の目で見て、話を聞き、確かめることを大切にしたらこそ、納得のいく選択ができたと思っています。後輩の皆さんも、これからさまざまな選択をする場面があると思います。どの道を選ぶかは自分次第です。自分が納得できる道を選ぶよう、ぜひ多くの経験を積んでください。その経験の一つひとつが、きっと未来の自分につながっていくはずです。

### 積み重ねたすべての経験を糧に、 憧れの空へ

中学から10年間、活水の吹奏楽部に所属し、中学・高校・大学それぞれの3年次には部長を務めました。「自分にリーダーは向いていない」と悩むこともありましたが、部を引っ張ることだけでなく、学年を超えて部員一人ひとりが生き生きと活動できるようサポートすることを、私なりのリーダーシップとして大切にしてきました。また、大学3年次の語学留学は、客室乗務員への志望をより確かなものにしてくれました。文化の違いに戸惑うよりも、好奇心が高まる自分に気づけたことは大きな発見でした。新しいことへの挑戦には勇気がいりますが、結果にかかわらず、その経験を通して得られるものがあるはずです。すべての出来事がつながって今の自分がいると考えています。就職後は、活水での10年間に感謝しながら、臨機応変な判断力とお客様の命をお預かりする使命感を持って、一つひとつのフライトを通して新たな発見と成長を重ねられる乗務員になりたいです。



国際文化学部 英語学科 2026年卒業

日本航空株式会社  
客室乗務職

宮崎 春花 さん  
(活水高等学校卒)



小畑 拓未 講師

## 暑い都市シンガポールに学ぶ！ 「もう一つの快適性」

地球温暖化により、日本では今後のさらなる気温上昇と夏季の長期化が予想されています。こうした状況が踏まえると、南方の国々には、将来の日本にとって参考となる点が多くあると言えます。そこで、2025年8月31日から9月4日にかけて、学生12名とともにシンガポールを訪れ、建築視察を中心とした「生活デザイン研修」を実施しました。

現地で目にした建築や都市空間には、暑さと上手につきあうための工夫が随所に見られました。ここで強調したいのは「冷房を我慢する文化」では決してないという点です。むしろ、

屋内の冷房空間と半屋外空間を組み合わせ、用途や滞在時間に応じて空間を使い分けることで快適性を高めている点が特徴でした。例えば、ホーカーセンターはその象徴的な事例です。大屋根の下には、風が抜けるよう設計された半屋外空間が広がり、日射を遮りつつ自然の風を最大限に取り込んでいます。さらに、シーリングファンによって気流を生み出すことで、快適な環境がつくられています。このように、強い日差しを避けながらも完全に屋内に閉じこもらない中間領域が、都市のあちこちに用意されています。このほかにも、植物の緑や水

の演出によって、視覚的にも体感的にも涼しさを感じられるデザインを数多く目にしました。

こうした工夫は、冷房の代替ではなく、冷房と共存する「もう一つの快適性」と言えるでしょう。日本でも夏の暑さは年々厳しさを増しています。だからこそ、シンガポールで見たように、日射を遮る工夫や風を活かす空間、水や植物を取り入れる環境デザインなど、多様な方法によって暑さと向き合う視点が重要になります。今回の研修は、学生たちが建築と気候の関係を実際の都市空間の中で体感しながら学ぶ、貴重な機会となりました。



シンガポールを代表する  
ホーカーセンターのラオバサ



緑化されたバルコニーが特徴的なホテル



雨水を利用した滝が流れ落ちる  
展示施設の中庭



### 【研究内容】

私は、保育・幼児教育の授業を担当しています。この道へ進むきっかけとなったのが、学生時代の幼稚園実習でした。子どもが夢中になって遊んでいる姿や、楽しそうな表情、そして自分の思いをまっすぐに表現している姿に感動したことを覚えています。この経験が、今の私の原点となりました。以来、保育・幼児教育の世界に魅せられ、現在は「保育実践の変容」をテーマに研究に取り組んでいます。保育園や幼稚園は、社会の変化とともに、これまでの実践を守り続けるのか、時代に応じて変えていくのかという難しい選択を迫られています。私はその「変える」ことの難しさや、どのような条件や体制が変容を支えるのかを研究しています。保育現場がより豊かに、持続可能なものに

なるよう、実践に役立つ研究を目指しています。

### 【自ら問い、考える人へ】

ゼミでは、長崎のもぎき恐竜パークさんと協力し、主に幼児を対象としたワークショップを実施しています。学生たちは「子どもたちが楽しく遊べるにはどうすればよいか」を真剣に考え、一つの目的に向かって互いに話し合い、協力しながら企画から準備、当日の運営まで担います。当日も、子どもたちの反応に合わせて臨機応変に対応します。こうした学びは、地域の方々との連携があってこそ生まれるものです。学内では得られない、「現場」による経験が、学生を大きく成長させてくれると考えています。

また、今年度から教養教育にも携

## Hello 研究室

### 研究テーマ

### 保育実践の 変容プロセスに 関する研究

### profile

健康生活学部 子ども学科  
島田 知和 講師

修士(教育学)  
専門領域: 保育、幼児教育  
主要担当科目: 保育内容総論、子どもと言葉、子どもと人間関係、保育実習  
所属学会: 日本保育学会、日本乳幼児教育学会、日本子ども社会学会、日本保育者養成教育学会

わせていただくことになりました。変化の激しい今の社会だからこそ、「自ら問い、考える力」が大切だと感じています。専門分野を超えて幅広く学ぶ教養教育は、異なる視点や知識が交わる場であり、新しい発想や問いが生まれるところです。答えのない問いに向き合い、自分なりの考えを紡ぎ出す経験は、学生たちにとって財産になると信じています。教養教育を通じて、そんな「考え続ける人」を育てていきたいと思っています。



# KWASSUI ALUMNI 学びの場を支える“もう一つの力”活水女子大学 父母会

## 支えられて、歩み出す ― 父母会奨学金がもたらした学びと希望

父母会奨学金は、経済的な支援にとどまらず、学生が安心して学びを続けるための心の支えにもなっています。支えられながら、学生たちは真摯に学業に向き合い、それぞれの専門分野で学びを深めています。2025年度奨学金を受給した学生の声から、その一端をご紹介します。向学心あふれる学生たちの姿をご覧ください。

### 看護学科 大塩 菜緒美 さん(仮名) 西陵高等学校卒

私の学修の目的は、看護師として必要な専門知識と技術を身につけ、看護師国家資格を取得することです。看護師は患者の命を預かる責任ある職業であるため、医学的根拠に基づく判断力と確かな知識・技術を習得することを目標に、日々の講義や演習、実習に目的意識を持って取り組んでいます。現在は国家試験に向けて知識の習得に励み、表面的な理解にとどまらず、根拠を意識しながら学ぶ姿勢を大切にしています。分からない点は自ら調べ、教員や仲間と意見を共有しながら理解を深めています。今後も主体的に学修を続け、協調性や責任感を養いながら、看護師として、また社会人として成長していきたいです。

### 生活デザイン学科 別府 未来 さん(仮名) 佐賀女子短期大学付属佐賀女子高等学校卒

父母会奨学金は、親元を離れ妹と二人で暮らす私にとって、安心して学生生活を送るための大きな支えとなっています。生活費は主にアルバイト代で賄っていますが、学業との両立には経済的な不安もあります。この奨学金を生活費に充てることで、安定した生活を維持しながら学業に励むことができます。また、趣味である手芸は、将来家庭科教員を目指す私にとって技術や表現力を磨く大切な活動です。奨学金の一部を材料費に活用することで、学びと趣味を両立した充実した学生生活につながっており、非常に有意義な支援と感じています。

### 看護学科 浜宮 若葉 さん(仮名) 西陵高等学校卒

私は大学生活において学業を最優先とし、日々継続して学習に取り組んでいます。各授業の演習前には必ず事前学習を行い、内容を理解した上で授業に臨むことを心掛けています。また、小テストや試験に向けて計画的に復習を重ね、理解が不十分な点は教員への質問や図書室の活用を通して補い、知識の定着に努めてきました。実技においても課題を分析し、反復練習を重ねることで技術向上に取り組んでいます。その結果、学業成績は学年10位から8位へと向上しました。現在は学年5位以内を目標に、さらに努力を続けています。奨学金は教科書や参考書の購入、学習環境の整備に活用し、より学業に集中できる環境づくりに役立っています。

### 食生活健康学科 広畑 泰世 さん(仮名) 純心女子高等学校卒

父母会奨学金は、学業に集中するための環境づくりに活用しています。現在、管理栄養士を目指して学修に励んでおり、国家試験を見据えた学習が本格化する中、奨学金を教材費や実習に必要な費用に充てることで、アルバイト時間を調整し、学業を優先して取り組むことができます。特に、参考書や問題集を早期に購入できたことで、計画的に学習を進めることができ、大きな支えとなっています。卒業までの期間、引き続き学業に誠実に向き合い、国家試験合格を目標に計画的な学習を継続していきます。父母会奨学金によるご支援に心より感謝し、その期待に応えられるよう努力します。

### 子ども学科 手柄 香織 さん(仮名) 活水高等学校卒

父母会奨学金を給付していただき、誠にありがとうございます。私は現在、子どもの発達や心身の成長、教育の基礎について学び、将来は養護教諭として子どもたちを支えたいと考え、日々の授業や課題に計画的に取り組み、知識の定着と成績向上に努めています。奨学金は学費の一部や教員採用試験対策の参考書購入に活用しました。早い段階から試験内容に触れることで、専門科目とのつながりを意識しながら学習を進めることができ、大きな支えとなっています。今後も養護教諭として必要な知識と姿勢を身につけ、子どもたちの心身の健康を支える存在となれるよう努力してまいります。



## 第49回全日本アンサンブルコンテスト 金賞受賞

3月21日(土)、広島文化学園HBGホールにおいて第49回全日本アンサンブルコンテスト(全国大会)が開催され、活水中・高等学校吹奏楽部の生徒が九州支部の代表として出場しました。本コンテストは、全日本吹奏楽連盟が主催する三大コンクールの一つであり、全国大会には都道府県大会と支部大会を勝ち進んだ、各地の代表校が集まりました。活水中・高等学校吹奏楽部は、昨年10月の全日本吹奏楽コンクール、11月の全日本マーチングコンテストに続き、全国大会に出場しています。日々練習を積み重ねてきた活動の成果が、ここでも実りました。



受賞者

川野涼穂さん(3年/バス・トロンボーン)、峰真里奈さん(3年/トランペット)、和田姫奈さん(2年/ホルン)、山本初香さん(1年/トランペット)

中学の部では活水中学校の4名が金管四重奏で演奏し、金賞を受賞しました。活水中学校としては、全国大会初出場での金賞受賞となります。

受賞者

一瀬愛奈さん(3年)、濱崎美友さん(2年)、福田茉侑さん(2年)、藤下心都葉さん(2年)

高校の部では活水高等学校の4名がフルート四重奏で出場し、銀賞を受賞しました。これは2021年以来、5年ぶり2度目の入賞となります。

今回のテーマ

## 働くっておもしろい! 「職業」を描いた本

今回ご紹介する2冊は、職業をテーマにした本です。小説と漫画、それぞれのかたちで、情熱をもって働く人々の奮闘や成長、職場で生まれる人間ドラマが描かれ、働くことの面白さや奥深さに触れられます。将来の仕事は、多くの人にとって大きな関心事。だからこそ、本の中でさまざまな仕事をのぞき、疑似体験してみませんか。

### 哲学と医療が交差する京都の病院で あなたも「生」を見つめてみませんか

『スピノザの診察室』 夏川草介著 水鈴社

現役医師である著者の経験をもとに描かれた『スピノザの診察室』は、京都の地域病院を舞台に、元大学病院の医師・雄町哲郎が、治らない病や看取りに向き合いながら、「その人らしい生」を支える姿を描く医療小説です。診療で交わされる京都の言葉や、出町ふたばの豆餅など、土地ならではの要素に人情味や温かみが息づき、物語をより身近に感じさせてくれます。

タイトルにある哲学者「スピノザ」が気になった方は、『はじめてのスピノザ 自由へのエチカ（講談社現代新書2595）』も合わせて読んでみてはいかがでしょう。物語の背景にある考え方への理解がより深まるかもしれません。技術だけでは救えない現実の中で、医師として何ができるのか、幸せとは何かを静かに問いかける一冊です。



京都の地域病院で働く内科医・雄町哲郎が、治療の先にある「その人らしい生」を見つめながら、人の弱さや尊厳に目を向ける温かくも深い医療小説。

### 図書館の舞台裏にクローズアップ! 「みんなの本」が紡ぐストーリー

『税金で買った本』 ずいの原作 系山岡漫画 講談社

小学生ぶりに図書館を訪れたヤンキー少年・石平が、借りっぱなしの本を返すことをきっかけに、そのまま図書館でアルバイトを始めることになる…そんなきっかけから物語が動き出すお仕事漫画です。原作者が元図書館勤務ということもあり、未返却本の弁償や延滞対応、本の破損、自習室のトラブルなど、利用者には見えにくい「図書館の裏側」の

実務がリアルに描かれ、現場の空気が伝わってきます。主人公の石平が図書館へ通う中で、辞書の使い方や司書の仕事、税金で支えられる公共図書館の役割に少しずつ触れていく様子は、読者とともに学んでいく感覚を味わえます。読み終えたあと、図書館に行きたくないと同時に、その存在の大切さをあらためて実感させてくれる作品です。



公立図書館を舞台に、本を借りる人・守る人の視点から「みんなの本」の大切さを描く図書館お仕事漫画。

#### 📖 地下書架で 本に囲まれるという体験

「まずはここを見てください」と山腰さんに案内されたのは地下書架。可動式の書架のハンドルの回すと、普段は見えない場所に多くの蔵書が収められていることがわかる。

「インターネットは目的の情報にすぐ届きますが、図書館では寄り道ができるんです。一冊の本の隣に、関連する別の本がある。その並びをたどるうちに、最初は想像していなかった分野へと関心が広がっていく。この偶然の出会いこそが書架で本を探す楽しさでもあります」

実際に棚を眺めていると、確かに気になる本が次々と目に入ってくる。ただ、その一方で、少し圧倒されてしまったのも正直な感想だった。「難しい本ばかりで、どこから読めばいいかわからない…」同行していた高校生も、思わず本音を漏らす。知の広がりがある一方で、どこから手に取ればよいのか分りにくいという課題もあるようだ。

#### 📖 出会いの「仕掛け」と、 知のセレンディピティ

「だからこそ、もっと気軽に本と出会えるような入り口をつくっています」

吉原さんが案内してくれたのは、館内に設け



られた特集コーナー。そこには専門書だけでなく、心に刺さるキャッチコピーが添えられたテーマごとの本が並び、思わず手に取りたくなる工夫がされている。

「本との出会いは、必ずしも探すものだけではなく、ふと目に入ること始まることも多いです。貸出数を増やすのは義務感じゃありません。出会いを増やすことなんです」と吉原さんは語る。

「例えば、悩んでいた時に手に取る一冊、実は数百年前に書かれた哲学書だったりする。図書館はそんな『時空を超えた相談相手』が見つかる場所だと知ってほしい。年間7冊が10冊になるというのでは、一ヶ月に二、三回、新しい

自分に会おうってことだと思っんです」私たちはその場で貸出冊数10冊への作戦会議を開いた。「教育や心理学の棚が固すぎるから、もっと『推し活』的なポップを立てたらどう?」「大学図書館の貴重書を使って、自分だけのオリジナルしおりを作るワークショップは?」そんな学生目線の提案に、「二人も!それは面白いですね!」と笑顔を見せてくれた。

#### 📖 アーカイブを日常に 引き寄せる

取材の終盤、私たちは貴重書に触れさせてもらった。重厚な装丁の聖書や明治期発行の書籍からは、その時代の人々の考えや空気が伝わってくる。それは単なる情報ではなく、誰かの「生きた証」そのものだ。

「図書館は、過去の人々の知識や経験が、本を通して未来へと受け継がれていく場所です」山腰さんの言葉が印象に残る。本を読むことは、著者の思考に触れ、自分自身の視野を広げていくことでもあるのだと思う。

「7冊で止まってしまうのは、まだその蓄積に十分触れていないということ。10冊、20冊と読み進める中で、自分の考え方が少しずつ深まっていく。そうした積み重ねが、大学での学びをカタチづけていくのだと思います」

#### 📖 私たちの「冒険」はここから

潜入を終えた私たちは、気づけば各自3冊ずつ本を借りていた。これ、さつき地下で見つけたんです。全然関係ない棚だったのに、タイトルに惹かれて「そう言うて笑う大学生の腕には、専門外の建築の本があった。吉原さんが語っていた『出会い』がすでに始まっている。」

活水女子大学図書館は、単なる「静かな学習の場」ではない。多様な資料の中を巡りながら、自身の関心や問いを見つけていく「知の迷宮」である。そこには、司書という強い案内役もいる。年間10冊、それは単なる数字の目標ではなく、私たちがどれだけ新しい世界に出会えたかという記録なのかもしれない。東山手の坂の上で、今日もまた、誰かと本との新しい出会いが始まっている。



潜入! 活水女子大学図書館  
30万冊の「知の迷宮」へ



「ええ、年間たった7冊?」図書館カウンター前で、私たち取材班は絶句した。活水女子大学図書館の蔵書は県内屈指の約30万冊。それなのに学生一人あたりの年間貸出冊数はわずか7冊。現在の貸出冊数は10年前のほぼ半分、この数字をまず一人10冊以上にすることを目標にしたい」と語ったのは、司書の山腰智子さんと吉原綾さん。私たちはそのヒントを探るため、迷宮のような図書館の奥へと足を踏み入れた。

## 院 | 長 | 始 | 業 | 礼 | 拝

十字架に込められた  
活水の精神と希望の歩み

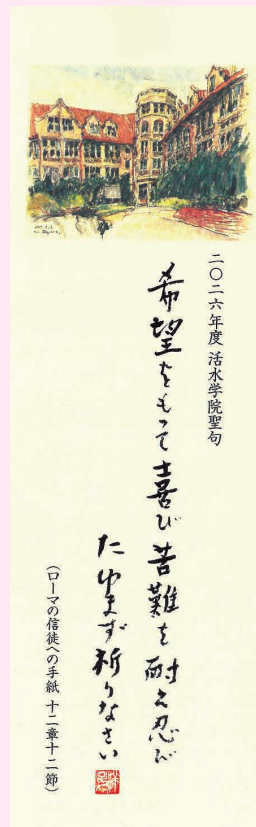
2026年度の始まりにあたり、今年度の学院聖句としてローマの信徒への手紙12章12節「希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい」を選びました。復活日（イースター）前後はキリスト教においてイエスの受難と復活を記念する大切な週ですが、この節目の時に、本院の象徴でもある「十字架」の意味を改めて分かち合いたいと思います。

十字架の「縦の棒」は神と人との結びつき（信仰）を、「横の棒」は人間同士の絆（隣人愛）を表わすと説明されることがあります。これを活水学院に重ね合わせるなら、縦の棒は私たちの教育の根幹である「建学の精神」です。それは単なる言葉ではなく、本院のモットー「知恵と生命との泉」が示す通り、日々味わうべき「活きた水」です。そして横の棒は、学生や生徒、教職員、教育を支える環境、財務も含めた学校組織基盤を意味します。この二つが交差する中心にイエス・キリストがおられます。これが活水学院の後半のモットー「主イエス・キリストに掬べよ」の意味であり、活水学院の特徴です。

現在、活水学院は少子化に伴う入学者減少など、これまでにない厳しい環境のなかにあります。私たちはこの現実を真摯に受け止め、過去にとらわれない新しい教育の歩みを模索していかなければなりません。困難な時代だからこそ、教職員のみならず、同窓生や保護者、地域の皆様も含めたすべてのステークホルダーが心をつなぐ必要があります。

旧約聖書に、民族の危機の中で捕囚から帰還した人々が「一人の人のように集まった」（エズラ記3章1節）と記されています。私たちも今こそ「希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈り」の御言葉を胸に、一人の人のように心をつなげて、活水学院の新たな未来に向けて歩んでまいりましょう。

2026年4月1日  
湯口 隆司



### デジタルブック配信のご案内

Living Waterは、2026年秋冬号よりデジタルブックでの配信へ移行いたします。メールアドレスをご登録いただきますと、最新号（デジタルブックのURL）をご案内いたします。恐れ入りますが、右記よりご登録くださいますようお願い申し上げます。

ご登録はこちら▶  
<https://forms.office.com/r/YvpLni3D5V>



また、寄付金をお寄せいただいた方には、引き続き冊子版をお送り申し上げます。詳細につきましては、右記までお問合せくださいますようお願い申し上げます。

MAIL  
[150bokin@kwassui.ac.jp](mailto:150bokin@kwassui.ac.jp)